

# 「ある ある ある」

作：平野俊興

語り：田口トモロヲ

『さわやかな 秋の朝  
短いけれど 指のない  
まるい つよい手が  
何でもしてくれる  
断端（だんたん）に骨のない やわらかい腕もある  
何でもしてくれる 短い手もある  
ある ある ある  
みんなある さわやかな 秋の朝』

これは、「ある ある ある」と題した、  
中村久子さんの詩の一部です。  
著者の中村久子さんは、幼くして両手両足を失いました。  
文中ある「断端<sup>だんたん</sup>」とは切除された端<sup>はし</sup>を意味します。

どんなに時を経ても、  
つらい人生を歩んだ人の言葉は胸を打ちます。

「ないこと」の不幸を恨むのではなく、  
「あること」を見つけて喜ぶことが大切で仕合わせであると、  
教えてくれます。  
両手両足がないという事実を、  
「与えられた身」として生き抜いた中村久子さんを、  
あの三重苦のヘレン・ケラーは、  
「私より不幸な、そして偉大な人！」と讃えました。

ついつい「ある」ことを忘れて  
「ない」ことに心を向けてしまいます。  
だから落ち込んだり苦しんだりするのです。

アナタが苦しんでいるとき、心配してくれる親がいます。  
アナタが悲しんでいるとき、一緒に悲しんでくれる友達がいます。  
おじいちゃんもおばあちゃんもいます。  
必ず、必ず誰かがいることを思い出してください。

そしてアナタが楽しかったら、

一緒に楽しいと思う親がいます。友達がいます。  
おじいちゃんもおばあちゃんもいます。  
アナタの笑顔がみんなを仕合わせにしてくれるのです。

私たちは多くの目に見えないものによって、  
繋がりながら生きています。  
あらゆるものに支えられ、助けられて成長していくのです。

「ない」ことを嘆くより、  
「今ある」ことに感謝できる、  
そんな人になってほしいのです。

「ある ある ある」